
天下蒼々

城宮風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天下蒼々

【Nコード】

N7296H

【作者名】

城宮風花

【あらすじ】

遠く蒼い空の下、大地を駆け抜け、力の限り生きた者達がいた。悲しみに泣き、喜びに笑い、非道を怒り、人を信じ、そして全てを愛した。歴史に刻まれる事のない物語が、いま紐解かれる。

第一話 鳥笛（1）

「ちょっと押さないで下さいよ」

「あ、悪い悪い。まだか？出口」

「まだです」

「あイタっ！頭打ったあゝ…何でこんな所通るなんて言い出したんですか、若あ」

「仕方ないだろうが。仮にも隠密行動が原則だ」

「…とか言って、逃げてきただけなんじゃ」

「シバくぞ」

「ほらほら2人共、もう出口が見えてきましたよ」

周囲をぐるりと高い城壁で囲まれたこの街は、名を紅コウと呼ばれる晋シン国の都である。小国ではあるが、物も人心も豊かでそれなりに栄えているこの国は、建国時よりとある一族によって治められていた。

国主の権力を無闇やたらと振りかざす事無く、国の有事には先頭に立って自らが動く…そんな一族が王族であることを民は誇り、信頼し、そして愛した。

そうしてこの国は長い時を内外共に平和に保ってきたのだった。

そんな一族の住まう王城は、更に城壁で囲まれ、都の北端に位置している。

ばこん！

突如、その城壁の一部が音を立てて外れた。警備兵の死角にできたその穴から、3人の人間が這い出してくる。

「うあー…やつと出たか！」

「うええ、埃まみれ…」

「2人とも静かに。穴塞ぎましたし、行きますよ！」

音を立てず、人目を避けて町の外れまで一息に走り抜ける。城壁から十分に離れたその場所で、3人はようやく止まった。

「…さて、と。後はつけられていないかな？^{シユン}瞬」

「はい。大丈夫です、若」

長い黒髪をゆるく結わえた、瞬と呼ばれる青年の答えに満足そうに頷く黒髪の少年は、まだ二十歳にも満たないほど若い。

「それで、今日はどのように？」

「ああ。最近どうも治安が悪いようだからな…釣りでもしてみようかと思ってる」

ニヤリと口角を上げて笑う少年を見て、2人は顔を見合わせる。彼らの主は人使いが荒いのだ。

キサラギ
「如月」

「はい」

名を呼ばれ、漆黒の髪を持つ少女が一步前へ進み出る。

「おまえ、今年で17になるんだったか？」

「そうですが…」

「お前に、頼みたいことがある」

数分後、如月と呼ばれていた少女は人々で賑わう街の中をただ1人で歩いていった。

先程までと違うのは彼女の服装。地味な目立たない色で動きやすさを重視したものから、若い街娘が身に付けるような華やかなものをまとっている。

そんな彼女を離れた場所から見る目があった。

「…若、まさか本気でやるとは思いませんでしたよ。本当に大丈夫なんですか？如月ですよ？」

「大丈夫だ、問題ない」

なんていったって俺の護衛なんだから、と自信あり気に笑う少年に瞬は頭を押さえる。

「そりゃあ、あの娘は強いですよ？体術は我が一族の中でもずば抜けてますからね。：しかし女は女です。男に数人がかりでこられたら力負けしますよ」

「元より承知の上だ：仕方なからう？今回は標的が女なのだからな」
「わかつてはいますが：」

心配げに表情を曇らせる瞬に、少年は一瞬目を見開いて顔をそらした。

「心配ない。何かあれば自らの手で助け出すのみだ」

その言葉には言外に“部下を見捨てはしない”という意味が込められている。

彼の部下である瞬にとってその言葉は大変嬉しく感じる。感じるのだが、しかし。

「：あのですね、少しは御自分の立場というか身分というかを考えて頂けませんか？リョウオウ陵王様」

「考えている。：考えているからこそその行動だぞ？」

「：一国の皇子がこんなことしますか？普通」

何度思ったかshれないが、護衛も楽じゃない：主の横で深々と青年は嘆息するのだった。

この黒髪の少年、実はこの晋国の第3皇子でその名を陵王という。
現皇帝の末息子で、今年で19になる。

瞬こと瞬明シュンメイと如月は、晋国皇族に最も古くから仕える一族の人間であり、陵王直属の護衛である。幼い頃からずっと行動を共にしてきたため、部下である以上に友人や家族にも近い関係だった。

「今回は事が事だからな…。だから如月を行かせた」

「それは十分に承知しております」

「エサに一般人は使えない。こっちまで危険だからな」

「その点は全く問題無いと思いますけど…如月の普段を考えると別の意味で不安なんですが」

「…奇遇だな、俺もだ」

悪い予感ほどよく当たるものはない。

この言葉を2人は後に、その身をもって知ることになるのだった。

第二話 鳥笛（2）

一方、1人街を歩く如月は陵王からの話を思い出していた。

最近、この都で行方不明者が多数出てきているとの報告があった。それも決まって若い娘ばかり。どうも良からぬ輩がなにやら暗躍しているらしい。被害者は増加の一途を辿っており、早急な解決の必要性があるという判断のもと、今回の囃作戦が決行された次第であった。

その囃役として如月が投入された訳だが…。

「（なんか全然来ないんですけど…）」

街を歩き始めてから既にだいぶ時間が経っている。まだ日は高いが、今回の事件に関して日中にも被害者は出ているため時間帯は関係ない。

「（…もしかして、私って女の魅力とか無い？）」

エサは獲物に食い付かなければ意味がない。

体術だけじゃなく、もう少し女としての魅力なんかも磨いておくべきだったか、と嘆息しながらも足は自然に動く。

そうして、細い道を曲がった時だった。

「どうも、娘さん」

「1人かい？街の噂を知らないのか？」

突如現れた2人の男達に進路を阻まれる。

こいつらだろうか…？

「行方不明者が出ているって話ですか？…なんでも人攫いとか言われてるみたいですけど」

にこり、と微笑んでみる。

そう、まるで世間知らずで怖いもの知らずの馬鹿な娘のように。

「そうそう、物騒だよなあ」

「あんたも昼間だからと言って1人でウロウロするもんじゃないぞ」

言葉とは裏腹に男達の目はぎらぎらとしていて、如月は内心ほくそ笑む。

かかった。

背後に1つ増えた気配に、今回の標的がこの男達であることは確信となる。

「…そうですね、今から帰るところなんで私はこれで」
「もう、遅い」

ぎり、と背後から腕を拘束される。

「さて、それじゃあ付いて来てもらおうか」

顔には困惑の表情を浮かべつつ、内心はしたり顔で“何も知らない哀れな娘”を彼女は演じるのだった。

くるり、小さな鳥が頭上を旋回している。

「…若、如月は上手くやったようですよ」

「して、場所は？」

「如月の合図がとび次第、コイツが案内してくれます」

いまだ2人の頭上を旋回し続ける鳥を指して瞬は言う。

「いつも思うが、本当にあれは賢い鳥だな」

「一族の者は皆、幼い頃より各自で鳥を育て教育を施します。…良き友人ですよ」

「そうか、友人とはいいいものだな」

優しい顔で笑う主に、瞬も穏やかな顔で頭上の鳥を見上げる。鳥はいまだ旋回を続けていて、合図が届いた様子はない。

「…ところであの手筈は整っているか？」

「は。全て御命令通りに。…すでに一族の者を待機させております」

「ならば行動を起こした所で問題はないな？」

「……隠密行動がバレるのを除けば」

一瞬、陵王は目を見開いてそして豪快に笑った。

「そうだな！それは確かに問題ありだ！」

「…まったく、説教は逃げずにお受け下さいよ！頼みますから」

毎回毎回探しに行く身にもなってみて欲しい、と嘆息すればますます陵王の笑い声は大きくなる。

「…だが、そんなことは行動を起こすにあたってさした問題では無
かろう」

2人の視線の先で、鳥が不意に声をあげて旋回を止めた。

「本当に大事なことは、もっと他にある」

「…これでよし、と」

細い竹で作られた笛を大切に胸元にしまい込む。これは“鳥笛”と言
って、鳥だけに聞こえる高い音を発するものだ。しっかりと磨か
れ、首から下げるための紐を通されたそれは父に与えられた。

「（これでこの場所は知らせた。…あとは）」

手にした鍵の束をじゅらりと鳴らし、少女は振り向く。

「あなた達を家に帰すだけね」

開かれた扉の向こう、寄り添い合うようにしてかたまっている同じ年頃の少女達に如月は優しく笑いかけた。

事は半刻ほどさかのぼる。

如月は腕を両脇から2人の男達に拘束されたまま、何処かへと連れていかれていた。

抵抗もせず、怯えたふりを続ける如月に男達もあまり注意を払わなくなってきた。いまが好機か、と如月は口を開く。

「…あの、わ、私っどうなるんですか？」

「そんなこと、聞いてどうする。聞いたところで逃げられないぜ？」

「それにしてもアンタは大人しくしてくれるから助かる。他の女共は散々暴れて泣き喚いて、連れて行くにも骨が折れた」

「まったくだぜ！ 気絶させれば静かだが、なにぶん重てえ荷物になっちゃうからな」

「言うな言うな。こっちはそれでいい金貰ってんだしよお」

「違いねえ！ と笑う男達に青筋を立てながらも、如月は口を閉ざす。陵王の考え通り、どうやら誰かが裏で男達を操り動かしているのはもはや間違いない。

「それにしても…あれだけの人数、何に使う気だろうな。妓楼に売り飛ばすにしても数が多いだろうし」

「あれか？ 金持ち様が困うため、とか」

「そりゃあ御大層な趣味をお持ちなこって！俺達にも少し分けてくれねえかなあ」

下品な笑い声、下卑た会話に吐き気がしそうだった。そしてそれ以上に、さらわれた少女達と同じ女として激しい怒りを覚えた。

薄暗い路地をどれほど歩いただろうか。男達に連れて来られたのは貧しい民達が暮らす地域：いわゆる貧民街の一角にたつ、崩れかけた建物だった。

「…私は売られる、の？」

大人しい娘を演じた甲斐あって、如月を監禁するための部屋へと連れていくのは見張り役らしい男1人だけだった。

「そうだ。心配しなくともお前だけじゃない」

「…どこへ？さっきの人達が言うように都の妓楼？それともお金持ちの館？」

如月の言葉に男は眉を寄せる。

「あいつら、ベラベラと話しすぎだ…」

「それで、結局どうなのほんとなの？」

男は苛立ったように舌打ちをして、頭を掻く。

「俺が知るか。まあ少なくともお前らが行くのは、この国から遥か遠くの地だろうよ。…おら、ここだ」

男は古びた鍵の束を取り出し、大きな南京錠をガチャガチャと外し

だす。錆び付いた扉が開いた先：僅かに差し込んだ光に照らされて、数人の少女が固まって座り込んでいた。

「：最後に1つ聞いてもいいかしら？ 私達をここに連れてくるように言ったのは、誰？」

「それを知ったところでお前はここから逃げられないさ」

俯いた少女に、男の視線が降る。その舐めるような視線は、まるで品物の値踏みをするかのようで。ぎりり、と少女は歯を噛み締める。

「：誰なのよ」

「そいつにとりいって逃がしてもらうつもりか？：残念なことに俺達下っ端は何も知らない。お偉いさんってのはしっかりしてるぜ、まったく。：なあ、なんなら俺が可愛がってやろうか？」

アンタはなかなか好みなんだよ、そう言いながら男が伸ばした手は少女に届く前に掴まれた。

「遠慮しとくわ」

ドサリと男が倒れる。完全に気を失っている男を冷たくいちべつして、如月は床に転がった鍵の束を手を取った。

「女、舐めてんじゃないわよ」

そして、胸元から取り出した鳥笛を思い切り吹いたのだった。

第三話　鳥笛（3）

薄暗い部屋に差した、光。その光の中に立つ少女は優しく笑っている。

「…ほんとうに、家に帰れるの？ほんとうに？」

呆然と光の中の少女を見つめ、震える声で尋ねる。

「嘘じゃない？夢なんかじゃない？ほんとうに…」

私達は、帰れるの？

それはこの部屋に閉じ込められていた少女達全員の、言葉だった。
何度叫んでも届かなくて。

何度手を伸ばしても、誰も握り返してはくれなかった。

「もう、大丈夫よ。ここから先は、夢じゃない」

座り込んだままの少女達の頬を、つうつと涙が滑り落ちる。いつのまにか彼女は目の前にいて、中途半端に伸ばされた手をぎゅっと握った。

「帰りましょう、みんなで」

はらはらと、声も無く、ただ涙が溢れて止まらなかった。

囚われていた少女達がひとしきり泣いた後、如月はすぐさま再び行動にうつった。

「連れて来られた子は他の部屋にもいるの？」

「はい：夜に、隣りの部屋からも泣き声が聞こえてきました」

「そう。ありがと、助かるわ」

ほんの数瞬、思案して最も効率的な逃亡経路をはじき出す。

陵王と瞬に連絡は送った。今頃は一族も計画通りに待機してくれているだろう。脱出した後の少女達の身の安全は、一族の者達を守る手筈となっている。

つまり、とにかく彼女達をこの建物から無事に脱出させる事さえ出来れば、何もかもが上手くいくはずだ。

ぴん、と周囲に神経を張り巡らせて気配を探る。

「（…いま周囲に見張りはいない、か）」

脱出の好機だといえる。

しかし、男達に気づかれずに脱出するには人数が多すぎるのだ。ならば如月がやることは1つ。

「これから、私が離れたところで騒ぎを起こす。その混乱に紛れて逃げるのよ」

脱出経路は大丈夫ね？

如月の言葉に力強く少女達は頷く。その様子に満足気に如月は笑顔をこぼした。

「じゃあ私はまず、他の部屋の鍵を…」

「あの、」

行動を開始しようとしていた如月を1人の少女が引き止める。

「私に、何か手伝える事はありませんか？」

一瞬、きょとんと少女を見つめて如月は口を開く。

「あなた、名前は？」

「鈴と申します」

「そう…じゃあ鈴、私と一緒に来てくれる？他の部屋の子達に脱出の説明をしたいのだけれど、あまり時間があるとは言えないから手伝って欲しいの」

「わかりました」

決まりだ、と2人は立ち上がる。座り込んでいた少女達もゆつくりと立ち上がった。

「それじゃ、行きますか!」

「…あのっ、あなたの名前は?」

かけられた声に如月は苦笑する。

「とある方にお仕えする、名も無き従者…ってね」

仮にも隠密行動なのだと主張していた主を思い出し、帰ったらまた説教だろうなと思わず笑った。

…どがんっ!!

腹に響く音がした直後、視線を上げた先に大きな砂煙があがった。

「…始めてしまったみたいですね」

「いやー、あいつはやることが派手だなあ」

のんびりとした陵王の言葉にそれで良いのか、などと思いながらも駆ける足は止めない。

「まったく、もう少し穏便に動いて欲しいものですよ」

「お前も素直に心配だと言えば良いものを…」

知らず知らずの内に駆ける速度が上がっている瞬時に陵王は苦笑する。

砂煙にだんだんと近付くにつれて、ざわざわとした喧騒が聞こえてきた。

「皆、上手く動いてくれているようだな」

「は。直に王城の方からも兵が出て来るでしょう」

「ではその前に事を収めねばな…大事にはしたくない。無駄に民達を怖がらせるのは好かん」

そう言って口をへの字に曲げる主に、瞬明は思わず笑みをこぼす。こんな彼だから、瞬明はこの命の限り彼に仕える事を誓ったのだ。

「まずは如月と合流する」

「は。…しかし、問題が」

言いよどんだ部下に、陵王は怪訝そうに顔を向ける。

「…この砂煙とそれによる混乱のせいで、如月の居場所が特定できません」

「あー…」

そう、この砂煙は彼等の計画予定外なのだった。

第四話 鳥笛（4）

…失敗した。一体なんなんだ、この状況は。

後ろ手に縄で縛られ、両足もひと括りに縛られた状態で如月は大きく溜め息を吐く。

全ての部屋の鍵を開け、囚われていた少女達を自由の身にしたまでは良かった。鈴に誘導を任せ、全員が脱出を始めたのを確認した後、単身で男達のいる部屋へと向かったのだが、ひよんな事から計画がバレてしまったのだ。

「（…たかが蛙一匹で悲鳴あげるなんて）」

まさに予想外。

脱出途中だった少女の1人が、目の前に跳ねてきた蛙に盛大な悲鳴をあげたのだ。その声に如月は慌てて少女達のもとへ戻り、当然の如く襲ってきた男達と応戦をするはめになった。結果として、少女達は全員無事に外へと逃がす事が出来たのだが…

「ざまあねえなあ…嬢ちゃん」

「……………」

「はっ！だんまりって訳かい」

「所詮、女ごときが男にかなう訳がねえって事だ！」如月自身は見事に捕らえられてしまったのだった。

「（…ほんと、情けない）」

まさかの失態にもはや溜め息しか出ない。陵王と瞬明に何と言われるだろうか、と如月はがっくり肩を落とす。周りで男達が煩くがなり立てるが、そんな事はいまの彼女にはどうでもよかった。

「おい。さっきから無視してんじゃねえぞ、小娘!!」

「…っ!」

髪を掴まれて、無理やり上を向かされる。体制が変わったために、縄がぎりりと軋んだ。

「誰に仕向けられた!？」

「……」

「ッこの女!」

頬を拳で殴られ、一瞬くらりとした目眩が襲う。つう、と閉じた唇の端から一筋血が流れた。

「どうするんだよ!! 約束の期日は明日なんだぞ!!?」

「殺せ! こいつを殺しちまえ!!」

「馬鹿野郎っ!! この女だけでも渡すんだよ! じゃねえと俺達が殺されちまう…っ」

「なにもかも…こいつのせいでッ! どうして、誰がこの女を野放しにしていた!？」

「…ばっかじゃないの？」

一瞬で部屋に静寂が満ちた。ぴりぴりとした殺気を孕んだ視線が如月に集中する。

「よほど死にたいらしいな、小娘」

「冗談言わないでよ。こんな所で死ぬ気なんてさらさら無いわ」

「…その減らず口も大概にしとけよ」

こっちはお前などいつでも殺せるのだ、と小刀を喉元に突きつける。

「言え。お前は誰の命を受けて動いている？いまここで言わなければお前の命は無いぞ」

喉元に僅かに痛みが走り、血が流れ落ちる感覚。

ぎらぎらと殺意を放つ男を前にして、不意に少女は笑顔を浮かべた。

「まだわかってないのね。…あなた達、本気で誰かに忠誠を誓ったことがないでしょう？」

「…なに？」

「忠誠を誓うってね、生半可な覚悟じゃできないのよ。たとえばこの

命が尽きようとも、私の全ては彼の人のためにある」

じわりと少女は自ら刃に喉元を押し付ける。

「ーッ！？なにを」

「だから例え何が起ころうとも：私はあの方の足枷にはならない」

年端もいかない少女から滲み出る裂帛の気迫に吞まれ、動けずにいる男達を見て、如月は艶やかに微笑んだ。

「それに、私は若を信じてるもの」

ガゴンッ！

もの凄い音をたてて、閉ざされていた扉が文字通り吹き飛ぶ。

「：無事か？如月」

「はい。大丈夫ですよ、若」

舞い立つ埃の向こうから現れた主に、少女は優しく微笑んだ。

ようやく見つけたことに安堵の息を吐くも、頬を腫らし、血を流す如月の姿に陵王は目を見開く。

「な、何者だあ!？」

「この女の仲間…だな」

喚き出す男達を無視して陵王は室内へと進む。

「わ、若…?」

「止まれ!! こいつを殺されたいか!？」

「…黙れ」

男の怒鳴り声を静かだが強い声音で制した陵王を、如月は息を飲んで見つめた。

「誰だ？」

「な、何？」

「…誰がこいつを殴ったのかと聞いているのだ!!」

ビリビリと空気が震えるほどの怒気に、男達が圧倒される。そしてようやく気付くのだ。

目の前にいる男との圧倒的なまでの格の違いを。

「ぎゃあ!」

「まったく…お前は何をやっているんだ」

「瞬!」

如月に小刀を突きつけていた男が腕から血を流して倒れる。

陵王が破壊した扉の向こうから、僅かに息を切らせて瞬明が現れる。

「遅かったな」

「護衛を置いて走り去ったのはどなたですか、まったく」

これも帰ったらお説教ですね、という瞬明の言葉は聞こえないふりをして、陵王は如月のもとへと歩み寄った。

「…この馬鹿者が」

「申し訳ありません」

ぼそりと零した言葉とは裏腹に、優しい手付きで手足を縛る縄を解く。

「瞬明！こやつらを全員締め上げろ」

「御意」

「その後はお前に任せる。好きにいたせ」

「承知いたしました」

途端に再び色めき立つ男達を冷たくいちべつして、陵王は如月の手を取り扉へと歩き出す。

「ま、まちやがれ！！その女を…ひッ！！？」

追いつがろうとする男に手にした剣の先端を向け、鋭い眼光で睨む。情けない声を上げて固まった男を振り向くこともなく、陵王と如月はその場を後にしたのだった。

それから程なくして、瞬明により容赦なくのされた男達が兵達によって王城地下の牢獄へと連行され、事件は無事収束となった。

「…それで？どうしてあんな事になったのか説明して貰おうか、如月」

「それは俺も是非、聞きたい」

「いや、あの…」

「若の命令をきけないとでも…？」

ところ変わって王城、陵王の自室では今回の件について如月への尋問が行われている真っ最中だった。

「そもそも、どうして火薬玉なんか使ったんだ！崩壊の危険もあったんだぞ！？」

瞬明の言葉に如月の目が泳ぐ。陵王は深く、溜め息を吐いた。

「…間違えたな？煙玉と」

「！」

「凶星か…」

この馬鹿娘、と呻いて頭を抱える瞬明。そしてジと目でこちらを見つめてくる主に、とうとう如月は全てを白状したのだった。

曰わく、

「煙玉を投げたつもりが火薬玉で？」

「自身も吹き飛ばされたあげく、駆け出そうとして服に足をとられて転けた……と」

「……はい。それで捕まりました、た」

つまりはそういう事だった。

そして部屋に訪れる静寂。

まるで嵐の前の静けさだと、如月は冷や汗をかきながらそんなことを思った。

「この……馬鹿者！！おまえは何度痛い目を見れば気が済むのだ！！」

「申し訳ありませんっ！！ごめんなさいッ！！」

「毎回毎回、変な所でどじりおって……ッ！どうして単独行動の時にばかり無茶をするのだ！？自身の技量と状況を考えろ、と何度言われればわかる！？」

正座した如月の、その頭上から陵王の雷が降る。瞬明はいつもの如く傍観者に徹しているが、思っていることは同じだろう。

ひとしきり怒鳴ったところで、陵王は疲れたように息を吐いた。如月は顔を上げるが、片手で顔を覆っているためにその表情は見えない。

「……わ、若？」

「頼むから、心配させるな」

くしゃり、と如月の黒髪をかき混ぜて呟くようにそう言った陵王の顔を如月は見ることは出来なかったが。

「(……おや？これは)」

1人傍観者に徹していた瞬明だけが、主の表情に浮かんでいた感情に気付いたのだった。

「(…これから楽しくなりそうだ)」

ぐしゃぐしゃと髪を乱されて文句を言う妹弟子と、笑いながら手を動かし続ける己の主を見る瞬明の顔にも笑顔が浮かぶ。

いつも変わらぬ穏やかな時間。これが彼らの日常だ。

晋国王城、第3皇子の部屋の窓から見える空は、今日も変わらず蒼い。

十鳥笛、了。

第五話 王城

「先の働き、とりあえず礼を述べよう。…よくやった」

「…有り難き御言葉にございます」

晋国王城のとある一室。そこに2人の人間…少年と壮年の男が向かい合う形で立っている。

2人とも一見すると質素な衣服を纏っているが、見る人が見ればかなり上質な生地が使用されていることがわかるだろう。

「…まあ、堅苦しいのはこれくらいにしようか。お手柄だったな、陵王」

「仮にも晋国皇帝がそんなんで良いんですか、父上…」

顔立ちの良く似た彼らは正真正銘、晋国皇帝とその第3皇子であった。

「そなたの此度の祖国への献身、感謝する！…これで良いか？」

「どうも。まあ、部下の働きの方が大きいですけどね」

愉快そうに声を上げて笑う父親に苦笑しながら、陵王は大きく伸びをした。そして不意に表情を引き締める。

「…此度の件、一応の収束をみましたがこれだけでは終わらぬでしょう」

「何故そう思う？」

皇子としての息子の言葉に、その父親であった男は即座に皇帝としての顔に戻る。その眼は鋭く、嘘を許さない。

「は。今回捕縛した者達は明らかに何者かによって誘導されておりました。しかも自身の情報を何一つ掴ませないまま、複数の人間との関係を築き利用していた事実から、そうとうに頭の切れる者であるかと」

自白を試みたものの、ほとんど情報が得られなかった時には落胆したと同時に違和感を感じた。黒幕がいるのは分かりきっていたことだが、その黒幕を突き詰めるために必要な情報があまりにも欠落していたのだ。不自然なほど、跡形も無く消されていた情報。そして瞬明が現場で発見したあるモノによって、陵王の中の疑念が俄かに現実味を帯び始める。

「…俺自身は、黒幕に他国の意思が絡んでいる可能性もあるとみています」

「その根拠は？」

「これです」

懷から出してみせた手のひらに、一本の細い金の鎖。手首などに付ける装飾品のようで、留め具のすぐ横に小さな板状の飾りが付いている。

「…この鎖がどうしたというのだ」

「この鎖自体に問題はありません。問題はこれです」

陵王が指したのは小さな板状の飾り部分だった。訝しみながらも、皇帝は手にとって目の前にかざし見て、そして驚愕に目を見開いた。

「これは…なこく那国の皇族紋章ではないかっ！」

…皇族紋章。

それは一国を治める皇帝一族のみが所有する紋章で、世間でいうところの家紋である。世界に国は数多くあれど、1つとして同じ紋章はなく、外交時など公式の場にて用いられる事が多い。ちなみに晋国は獅子と太陽が描かれたもので、皇帝や陵王を始めとする皇族はその紋章の刻まれた金の首飾りを常に身につけている。

そして、件の板飾りに刻まれていた紋章は剣と鳶。それは晋の隣国である那国のものであった。

「この鎖だけで黒幕が那国皇族…ひいては那国という一国であるのか、それとも那国の皇族から紋章入りの物を手に入れるだけの力を持つ者であるのかはわかりません。しかし後者である可能性は低いかと」

「うむ…私も同意見だ。皇族紋章は皇族以外の者がめったに手に入る事が出来るようなものではないからな」

それに、と皇帝である男は言葉を続ける。

「近頃、なにやら不穏な動きがあることも事実だ」

「不穏な動き：戦が始まるのですか？」

瞬時に顔が強張った息子に、そうではないと首を横に振る。

「現時点で戦が起こる兆しはない」

「ではいい…」

「陵王」

思わずたたみかけるように問いを口にすれば、やや固い口調で名を呼ばれた。はっとして見つめた瞳に、これ以上の話はしないという意思。

「…申し訳ありません」

「いや、良い。私も悪かった」

気にするな、と手を振った皇帝はもうただの父親の顔で笑っていた。

カーン、カーン。

都中に鉦鼓の音が響く。その音にぼんやりとしていた陵王がはっと我にかえった。

「昭兄上達と食事の約束があったんだった！」

「なんだ、あいつとなんて珍しいな」

「なんでも、義姉上が久しぶりに会いたいと仰ってるそうで…」

「それはまた…その事をおまえに告げるあいつの顔が、目に浮かぶようだよ」

どこか同情の眼差しを向けてくる父に、陵王は乾いた笑い声を返す。

「というわけで、父上。俺はこれで」

「うむ。早く行ってこい」

挨拶も早々に部屋を辞去する息子の背に、皇帝はひらひらと手を振って、そして残された金の鎖を厳しい目で見つめるのだった。

「遅い」

「……も、申し訳ありません」

ところ変わって王城東屋。中庭に造られたその場所は、周囲に咲き誇る花々で美しく彩られ、地上の楽園であるかのように穏やかな空間である筈なのだが。

「兄を待たせるとは、いい度胸だな。陵王よ」

「えっと、父上と話をしています……」

「ほう？ ああ、あれか。貧民街の一角を爆破、損壊した挙げ句、民の住居にまで被害を及ぼし、多額の金を使って辺り一帯の修繕が必要となった件か」

「……いやあれば、それほど」

「愚か者が」

「申し訳ありません」

淡々とした兄の叱責に、ただ頭を下げる事しかできない陵王には、その場はまるで雪原のように感じるのだった。

「もう、それくらいにしたらどうですか」

「巴……」

「せっかくの食事が冷めてしまいますよ？ 昭義様」

柔らかな声音でかかった制止。しぶしぶといった様子で口を閉じた兄に内心かなりほっとしながら、陵王は声の主を振り向く。

「ありがとうございます、義姉上」

「久し振りね、陵王」

にこりと笑った女性に、ようやく陵王は笑顔をみせた。

陵王が兄と呼ぶ青年こそが晋国第1皇子、名を昭義という。王位継承者であり、異例ではあるが現在の晋国宰相である。皇子という身分に寄りかかる事を良しとしない彼は、実力を持ってして現在の宰相位に就いたという強者だ。常に冷静沈着、そんな彼を氷の宰相と表現した者もいる。

……しかし。

「今日の午後は遠乗りにでも行くか」

「今日の政務はもう終わったのですか？」

「……終わらせた。最近、寂しい思いをさせてしまっていたからな」

「昭義様……っ！」

大恋愛の末に娶った妻である巴の前では、その氷も跡形もなく溶けるのであった。

「食事が冷めますよー、二人とも」

「……貴様」

「あら、本当。さあ、食べましょう」

2人の空間を邪魔された昭義は額に青筋を立てたが、巴はにこりと

笑って、何事も無かったかのように食事を始めた。

巴は昭義の最愛の妻であり、元はとある小さな島国の姫である。昭義との大恋愛の末にこの国へと嫁いできた彼女は、まだこの国に来てから日は浅いものの、その優しく穏やかな人柄から多くの者達に愛されている。

「まったく、貴様には苛々させられるばかりだ！」

「……申し訳ありません、兄上」

大きく悪態を吐く兄に、若干身を縮こませた陵王。いつも思う事ではあるが、妻とその他に対する態度が圧倒的に違うのはもはやあっぱれとしかいいようがない。
そして。

「いい加減になさいまし、昭義様」

「と、巴……」

「陵王は私がお呼びしたのです。何か文句があるなら私に仰るのが筋というもの。これ以上、私の義弟にそのような態度をおとりになるようでしたら……容赦しませんことよ？」

どこから取り出したのか、愛用の薙刀を手に凄む彼女は、この王城で昭義に勝てるただ1人の女でもあるのだった。

「それで、あなたは元気にしていましたか？ 陵王」

「はい。義姉上も久し振りにお会いしましたが、お元気そうでなによりです」

「ありがとう。……どうしてなのか、昭義様がなかなか会わせてくれなくて」

困った方だわ、と苦笑する彼女はそれでも満更ではない様子だった。

「本当に、実の弟にまで妬くことはありませんのにね」

「あはは……」

話している間も兄からの視線が痛い。いままで執着心の欠片も無かった男が一度惚れたらこうなるのか、と感心してしまうほど昭義は巴を大切にしている。そんな兄の姿を見るたびに、陵王はなんだか温かい気持ちになるのだった。

「ところで、陵王」

「はい」

「そなた、最近よく無茶をしてるみたいですね？」

にっこりと笑顔で言う巴に、一瞬驚いて動作が止まる。何事もなかったかのように笑顔を作る陵王であったが、内心で冷や汗をかいた。

「そんなことはありませんよ」

「嘘おっしゃいな」

「……」

何も言えずにいる陵王に、巴はため息をひとつ。

「言いたくないなら言わなくてもいいわ。ただ、1つ覚えておきなさいな。あなたが無茶をして傷付けば必ず悲しむ人間がいる、と。そして必ず誰かが傷付くでしょう」

「……肝に銘じておきます」

真剣な顔で頷いた陵王に、やっと安心したように巴は笑う。その後はその話題に触れることもなく、食事は和やかに進んだ。

食事が終わり、兄夫婦に挨拶をした後に部屋を辞去しようとした陵王を引き止めたのは、意外な事に昭義だった。

「……おまえが何を思っているかは私の知るところでは無いが、あまり無闇に手を出すな。思わぬしっぺ返しを喰らうぞ」

「……」

「心配せずともこちらにも、策はある」

いつになく真剣な瞳で言われた言葉。それは紛れもなく、弟を心配する兄の言葉。

「……力有るものが力無きものを守るのだと、教えて下さったのは昭兄上です。俺もこの国の皇族だということを、どうかお忘れめさるな」

そして簡単な挨拶の後に部屋を辞去した陵王の背を、昭義と巴は何も言わずに見送ったのだった。

「昭義様……」

「心配するな、巴。あれも私の弟だ。簡単には倒れぬよ」

「……あの事は話さなくて良かったのですか？」

「あいつのことだ。もう知っているのだろう……だからこそ、父上のもとに行った」

「あ、それで……」 「まったく、陵王は父上によく似ている。良いところも、悪いところもな」

僅かに笑みをもらした夫に、巴も微笑む。

ゆつくりと動き始めた時代の歯車に、止まるための歯止めは無い。

廻り来る流れにただ身を任せるか、逆らうかを決めるのは、どんな時もそこに生きる人間なのだということを。

彼等は誰よりも知っていた。

十王城、了。

第六話 王の盾

王城にもすっかり夜の帳が落ちた頃、篝火で照らされた小道を行く影がひとつ。まっすぐに第二城壁へと向かって行く。やがて人影は小さな扉の前で立ち止まった。

コン、ココン。

独特なリズムで扉を叩くこと数回、ぎいぎいと軋んだ音を立てて扉が内から開いた。内から漏れる光に、人影の顔が照らされる。陵王であった。

「これはこれは……このような時刻に“王の盾”に来られるとは如何なされましたか、若

「いつもの野暮用だ」

「そうでございますか。失礼致しました、ではどうぞ」

扉を開けた男は、すっと身を引いて道を開ける。無表情で陵王が扉を抜け、二歩踏み出した瞬間。

ガキィ…ン!!

突如として響いた剣戟の音。男の短剣と陵王の剣が一瞬の間に交わり、重なる。

「相変わらず……容赦ないな」

「いやはや、これくらいではまだまだ軽いものでしょう? 若」

お互いに剣を交えたまま、二人してにやりと笑う。そうして同時に剣を収めた。

「まったく！よくも飽きないものだな！」

「どんな時にも“油断大敵”って奴ですよ、若。これが御身を守るための術として身に付くのですからね」

鍛錬みたいなものですよと、からから笑う男にやや呆れながらも、陵王は満足げな笑顔になった。

「さすが、と言うところか？」

「お褒めの言葉ならば素直にお受け致しましょう。……“王の盾”へ、よくぞおいで下さいました」

“王の盾”とは、王城を囲む二つの城壁があるうちの内側の物を指す。この城壁の内部には、代々晋国皇族を護る任につく二つの一族が暮らしており、昼夜問わずの警護態勢を整えている。もしも何か事が起こった時に王城を守る、最高で最後の砦となる事から、通称“王の盾”と呼ばれている。陵王の護衛をつとめる瞬明と如月も、当然の如くこの“王の盾”に暮らしていた。

……何だこれは。

如月と瞬明の一族が暮らす区域に、一步足を踏み入れた瞬間に陵王が思ったことである。

「若?。」

呆然としている彼を瞬明が見つけて声をかけるも、陵王の視線は室内に向けられたまま動かない。

それもそのはず。室内は凄まじい惨状を呈していた。

倒れた燭台、石造りの床でゆらゆらと踊る小さな火。

割れて散った花器に、バラバラに散乱した花。

そして床と言わず壁と言わず…果ては天井にまで突き刺さった、無数の黒光りした暗器。

室内はさながら嵐の過ぎた後のようで。

「…瞬、これはいったい何事だ？」

そう呟くように尋ねる己の主に、瞬明はただ苦笑するしかないのだった。

「この惨状はいったいなんだ！？……まさか賊でも入ったと」

「落ち着いてください、若」

いつものことですから、と苦笑する瞬明に陵王は怪訝な顔を向ける。

「……俺はこんな惨状を見たのははじめてだぞ」

「あー……、そういえば若のいらっしゃる時にはいつもありませんでしたね」

まあここで見ていればわかりますよと言う、その瞬明の声をかき消すかのような足音が近付いてくる。そして怒鳴り声。

「…から、ーんしょ！」

「そ…！まだ…、き」

何を言っているかまでは聞き取れなかったが、その声の片方は陵王のよく見知ったものだった。

「如月……？」

陵王がそう呟いたその時、いままでで一番大きな怒鳴り声が二人の耳をついた。

「……ッだから私は姫じゃないって何度言ったらわかるのよーっ!!」

まさに渾身の叫び。

びりびりと鼓膜に響くその音量よりも何よりも、陵王には彼女の叫ぶ内容にしばし唾然とした。

ただただ、と激しい足音がどんどん近付いてくる。そして陵王と瞬明の目の前を、如月ともう一人が物凄い速さで走り抜ける。

「私は、私でしかないの!! 姫なんかじゃ、ない!!」

「いいえっ! 長の娘であるあなた様はこの一族きっての血筋の持ち主……そして同時に我等の姫であります!! 何度そう申し上げればおわかり頂けるのです、かッ!!!!!!」

カカカッ!

如月を追う、少し年かさのいった女が怒鳴った言葉の合間に素早く投げた暗器が床に刺さる。かなりの手練れである陵王も、思わず見とれてしまう程の素晴らしい腕前である。飛んでくる暗器を避けて、器用に身を捻らせた如月もかなりのものだ。

「甘いわよ、ばあや！！これくらい避けられないとでも……ツキや
あぁ！？」

「姫様もまだまだ、でございますよ」

いつの間に仕掛けたのやら、暗器と暗器の間に張った細い糸に足を
とられて見事に転倒した如月に、息を切らしてすらいない女はどこ
か楽しげにすら見える笑顔でそう言ったのだった。

実のところ、如月が“姫”であるというのは決して間違いではない。
話は彼女の祖母まで遡るのだが、彼女の祖母は現在の皇帝の姉姫に
あたる人である。護衛をしていた一人の男を愛し、降嫁したのだ。
そして生まれたひとり娘が如月の母の、華那^{カナ}。皇族の血を引く娘と
して育てられた彼女もまた、護衛だった男と恋に落ちて結ばれる。
その娘が、如月なのであった。

あの後、主の来訪に気付いた如月の焦りようは見物だった。猛烈に
謝られた後、支度があるとかで如月を待つ間、別室にてもてなしの
お茶を二人して啜っている。

「……如月が姫、ねえ」

「まあ、普段を考えると俄かに信じられる話でもないですが」

知らなかった訳では無いが、すっかり忘れていた。皇族紋章を与え
られ、一年に一度の集まりに参加する資格があるのは直系だけだ。
そして如月は直系ではない。

「……だから若、身分違いの恋なんて障害はないんですよ」
「ーッげほ！」

さらりと爆弾発言をした瞬明に、食道を通過しようとしていたお茶が反乱を起こした。げほげほと咳き込む主の背を、笑いながら瞬明が撫でる。

「おまつ…瞬、何を!？」

「なにを動揺してるんです? 若」

「そ、そんな事はない!!」

「顔、赤くなってますけど」

「ううう、うるさい!!」

陵王にとって如月は部下だ。それ以上でもそれ以下でもない。好きか嫌いかで聞かれるともちろん嫌いな訳など無いが、そのような事を考えた事もなかった。
それなのに。

「(どうしてこんなに焦っているんだ、俺!?)」

どきどきと胸が全力疾走している。おかしい。こんなことは今までなかったのに。

「申し訳ありません、遅くなりました…って何やってんですか? 若」

陵王がひとり悶々としていたその時、扉が開いて如月がひょっこりと顔を出した。

「別に、何でもない」

「……? ならいいんですけど」

クスクスと笑う瞬明をひとにらみして、陵王は手元の杯に残った茶を一気に飲み干す。そしてようやく、この場へ来た本来の目的を思い出したのであった。

「やはり、那国が絡んでいるのは間違いない」

いつになく真剣な顔で、従者二人は主の言葉に耳を傾けていた。

「……確信できるような証拠があったのですか？」

「いや……父上に軽くカマをかけてみた」

「皇帝にカマかけるって……相変わらずの怖いもの知らずですよ、ね、若って」

陵王の発言に若干呆れながら、如月は笑う。

「皇帝といっても、実の父親だしな」

「あ、そうか……」

苦笑して答えた陵王に、如月はいま思い出したかのように納得。

「それで皇帝はなんと？」

「……全く話してはくれなかった。ただ不穏な動きがあるとしたか」「不穏な動き？」

「ああ……まだわからないが、もしかしたら」

「戦……ですか、若」

「まだ不明だがな。可能性はある」

戦という言葉に顔が強張った如月の頭をぽんぽんと叩いて、陵王は話を続ける。

「いまは乱世。……戦の可能性だけは捨てきれない」

何事も平和的な解決で済ます事は出来ない、なんて。現実を知る者達には、哀しくも正しい真実。
綺麗事なんかじゃ、生きてはいけない。

「……国境周辺が気になりますね。偵察隊を放っておきます」

「先日の事件にも関与していたとなると、国内に間者が入り込んでいてもおかしくはない。……頼んだぞ、瞬」

「は。お任せ下さい」

「報告は直接俺のもとに持ってこい。皇帝や昭兄上のもとへは間違っても持っていくなよ、説教喰らうのは俺なんだからな？」

「御意」

跪き、深々と首を垂れて命令を受けた瞬明に満足げに頷いて、陵王は如月へと目を向ける。

「如月は引き続き、都の様子から目を離すな。どんな小さな事でもいい……異変を感じたらまっすぐに俺のもとへ来い。絶対に単独で行動を起こそうとはするな」

「……若の御心のままに」

如月も同じく跪いて命令を受ける。その様子を見た陵王はひとつ頷いて、小さく息を吐いた。

「すまない。お前たち二人にはいらぬ苦勞をかける」
「そんなこと気にしないで下さいよ、若」

陵王の言葉に、瞬時に立ち上がった如月は困ったように笑っていた。

「私も瞬も、自分の意思で若についていこうと決めたんです。私達が勝手についていってるだけなんですから、苦勞とかそんなのありませんよ」

にこりと笑う如月と、その隣で同じく穏やかな微笑みを浮かべる瞬明を見て、陵王の顔にも笑顔が浮かぶ。

「……ありがとうな」

「どういたしまして、ですよ。若」

どこか照れくさそうに答えた如月を、瞬明がからかい顔で小突く。

「如月もたまには良いことを言うじゃないか」

「瞬はうるさい」

部下二人のやりとりに、思わず陵王は声を上げて笑った。自分はなんて恵まれているのだろう、と思った。三人ならきつと全てが上手くいく、なんて。一瞬でも思ってしまうくらいに、全てが輝いて見えた。

混沌とした世に輝く、大切な存在。そして陵王の中に生まれたひとつの決意があった。

「……お前たちは、俺が守ってやる」

「若ったら、逆ですよ！逆！」

「我々が、あなたを守るんです」

護衛が主に守られてどうするんだと笑う部下達に、そうだなと頷きながらも陵王はその決意を翻す気はなかった。

たとえこの先何があろうとも、

「…つとそういえば、如月に陽兄上ヨウからの手紙を持ってきたのだっ
た」

「陽千様ヨウゼンからの！？わあー、ありがとうございます！！」

今と変わらずにいられたらと願うのに。

兄からの手紙を受け取った時の如月の満面の笑みに、胸のどこかがツキン、と痛んだ。

どうしてこんなにも、胸が痛むのだろうか。

固く閉まった筈の蓋が、カタリと震えた。

十王の盾、了。

第七話 風の唄（1）

『…この風は何処まで吹き往くのか』

『誰も知らない遠い地に咲いた名も無き花の哀しみを乗せたまま』

『君の名を呼ぶこの声もどうか乗せて欲しい』

『私にはもう貴方の地へ行く術など無いというのに』

『忘れられないこの想いを何処かへ流しておくれ』

『そして叶わない夢を見た女を哀れむがいい』

『それでも私は』

『叶わない夢を見る』

ふわりと、微かに花の香りを感じて如月は振り向いた。

「いつから其処にいらっしゃったのですか？ お祖母様」

「さあ……いつでしょうね」

柔らかな微笑を浮かべる老婦人に、如月は少しだけ困ったように笑う。

「……“風の唄”をあなたが歌う日が来るなんてね」

優しげに目を細めて、呟く祖母から気恥ずかしげに如月は目をそらす。気配に気付けないなんて初歩的な失敗をおかした事も問題だが、それ以上に歌を聞かれた事の方が彼女にとっては問題だった。

「どういう心境の変化かしら？」

「……別に、特に意味なんてありませんよ」

むすっとした顔のまま、ぶっきらぼうに呟くが余計に面白がらせるだけだったらしい。くすくすと笑う声が耳に届いて、自分の意思に関係なく顔が赤くなっていくのがわかる。懐かしい人からの手紙を読んで、ちよつとばかり感傷的になっていたけど、わかつてはいるのだが、気恥ずかしい。それにしても無意識に口ずさんでいた曲が“風の唄”だなんて、本当にどうかしていたと思う。“風の唄”は叶わぬ恋を歌う恋歌だ。

「私は恋などしません。私の全ては皇族の守護を宿命とする、この一族の定めと共にあります」

「……昔からあなたはそればかりね。如月」

頑なな言葉に、元皇女である老婦人は悲しげに微笑んだ。立派に成長を遂げた孫娘の姿に、もう何年も前に失った我が子の姿が不意に被る。

「お祖母様、私はね……母様のようにはなりたくないの」

「……如月」

「ただ待つだけしかできないなんてまっぴらだし、私は守られるよりは守りたい。……だって私のせいで誰かが血を流すなんて、耐えられない」

「優しい子ね」

「いいえ、私が我が儘なだけ」

悲しげに否定した孫娘の気持ちを思うと、胸が潰れそうになる。あんな事があったというのに、よくぞ強い娘に育ったものだと思婦人は思う。

「……“風の唄”はね、よく母様が歌ってたの」

だから無意識に歌ってしまったみたい、と呟く少女がひどく儚げに見えた。

幼い頃の記憶というのは、時に鮮明に残ることがある。如月にとって、今は亡き母との日々がそれにあたった。

『かあさま!』

小さな手を伸ばせば、必ず抱き締めてくれた温もり。

『なあに？如月は甘えん坊ね』

笑いながらも膝に乗せてくれて、そして静かに歌う母が大好きだった。

『かあさまはいつも、そのおうたなのね』

『如月はこのお歌は嫌い？』

『ううん！いちばんすきだよ！』

『……これはね、“風の唄”っていうの。どんな意味のお歌かわかるかしら？』

『わかんない、けどかなしいかんじ』

教えて、とねだれば母は決まって首を横に振る。そして笑って言うのだ。

『……きつと、如月も大きくなったらわかるようになるわ』

その時のまるで大事な宝物を見るような優しい目が、ひどく印象的だった。

優しい日々の思い出を何度も辿っていくその度に、如月は必ずこの場面を見るのだ。

そして、場面は急展する。

その記憶は途切れ途切れで、正しい順序であるのかすらもわからない。

ただひとつ、確実にわかることはこれが優しい日々の幕切れだということだけだ。

少し離れた場所で、武器を構えている父や一族の者達。聞き慣れない怒鳴り声と、気持ちの悪い笑い声に耳が上手く機能しない。

くしゃり、と頭を撫でる母の優しい手。見上げれば何故か母は微笑

んでいて。ゆつくりとその口が動く。聞こえない言葉、そして。

『……………、あなただけは』

直後、もの凄い力で背後へ突き飛ばされた如月の目に映ったものは、母の体から噴き出す赤い血飛沫だった。

そして、最後の場面は必ず花に埋もれた母の棺の前。

『如月、母様はおまえを守ったんだよ』

隣に立つ父の声がそう言って、ようやく記憶の世界が閉じていくのが常だった。

はっ、と如月は暗闇の中で目を覚ます。不自然に荒くなった息。着ていた服は汗でじとりと濡れている。

「（夢……か）」

懐かしい陽千からの手紙、そして祖母との会話が久しぶりに過去の夢を見せたらしい。大きく息を吐いて、如月は寝台から抜け出した。

眠る気も失せて、ぼんやりと歪な月が浮かんだ夜空を窓から眺める。そういえば、昔はよくこうやって月を眺めていたものだった。……ほとんどの場合は疲れ果てて、泥まみれで地面に転がった状態でだった。

「よく、頑張ったよね……」

母の死後、如月は一族の人間として生きるためにさまざまな修行に身を投じた。修行は厳しく、苦しいものであったが、幼い彼女にとっては何れすらも救いだった。修行に打ち込んでいる間は何も考えずにすんだ。

娘を守るために、母は死んだ。

その愛の深さはどれほどだったのだろうか。一族の者達は皆揃って母を讃えた。勇敢な女だと。強い人間だったと。けれど、それらの言葉は如月にとっては何の意味もなさなかった。

父の言葉が、重かった。

周囲の者達からかけられる言葉が重かった。

まるでお前が母を殺したのだと言われているようで、心は罪悪感に潰されそうだった。誰にも責められることは無く、救われた命だからと自ら死ぬこともできない。苦しくて仕方なかった。

あの頃を思い出すと、今でも胸の中が苦しくなるような気がして、

如月は大きく息をついた。

「やっぱりな」

「!……瞬、なんで」

背後からの声に振り向けば、開いた扉に寄りかかるようにして瞬明が立っていた。驚きで固まっている如月に目をやって、おもむろに息を吐く。

「背後の気配に気付けないなんて、おまえも落ちたもんだな。如月」
「……うるさい。なんで瞬がここにいるのよ」

「別に、いつもの事だろ？ 任務入った時に呼びに来てやってるんだから」

本日二回目の失態に、ぼつの悪そうな顔で言う如月が瞬明の言葉に顔色を変える。

「なにかあったの？」

「いや、今のところは何も」

瞬明の言葉に体の緊張を解く。安堵と共にやってきたのは脱力感。

「……じゃあ何なのよ」

あきらかに疲れたような空気をかもし出している如月に、瞬明はいたずらっぽく笑う。

「落ち込んでる誰かさんに、手合わせでも願おうかと」
「……是非」

月明かりの中、好戦的な瞳が愉しげに細められた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7296h/>

天下蒼々

2010年10月9日19時51分発行